

研究課題名	【Web 会議番号 2020_03】 小麦アレルギー経口免疫療法の耐性誘導における維持期の摂取回数に関するランダム化比較試験
フリガナ	オカダ ユウキ
代表者名	岡田 祐樹
所属機関（機関名） （役職名）	昭和大学医学部小児科学講座 講師
本助成金による発表論文，学会発表	発表予定だが具体的な学会名や論文投稿先については未定

研究結果要約

＜背景＞経口免疫療法(OIT)において、SU(sustained unresponsiveness)を達成のための最適な維持期の摂取回数については分かっていない。

＜目的＞本研究の目的は、自然耐性を獲得する事が難しいと思われる小麦アレルギー患者を対象に維持期の長さを2群に分けてOITを実施し、維持期の週数の違いがもたらす耐性化獲得の効果を検証することである。

＜方法＞2020年4月から2023年3月にかけて、小麦アレルギーがあり当院通院中の2歳以上の児を対象とした。24g以下の小麦負荷試験で陽性が確認できた症例に対し、維持期12週群及び36週群にランダム化割り付けを行った。ゆでうどん24gまで増量後に12週もしくは36週の維持期を行った。その後、脱感作及びSU確認のための負荷試験をそれぞれ行った。

＜結果＞2021年3月末時点での中間結果の報告である。2021年3月末時点で適格基準を満たした症例は11名いた。年齢は中央値（四分位）5（3-5）歳、男児8名（72.7%）であった。アナフィラキシー歴のある児は9名（81.8%）いた。負荷試験の陽性閾値はゆでうどん1g以下：6名、ゆでうどん3g：2名、ゆでうどん24g：3名であった。OIT開始時の検査数値は総IgE 811(397-1645)IU/mL、小麦101(19.6-101)Ua/mL、ω5グリアジン5.5(1.7-26.2)Ua/mLであった。脱落した児はおらず、増量期の児は8名、維持期に到達した児は3名、確認試験に到達した児は1名であった。

＜結語＞1年目終了時点で目標症例登録数よりやや少ないが、登録症例に関してはプロトコル通りに進んでおり順調である。